

## オヤングレン著『日本文典』（その6）

岡 本 信 照 訳

〈Resumen〉

A continuación del volumen anterior, aquí presentaré una versión japonesa del *Arte de la lengua japona* de Melchor Oyanguren de Santa Inés (México, 1738), editado por Otto Zwartjes en 2009. Esta sexta parte, que es la última, corresponde al Libro IV. Por premura de espacio, no obstante, omitimos los últimos capítulos VII, VIII y IX.

### 第 4 卷

#### 日本語の韻律および修辞についての雑記

日本語で *cazu*（数）や *cazoye*（数え）は非常に冗長である。というのは、『語彙集』で見られるように、すべてのものが異なった数え方を要求するからだ。ここでは（第1巻の数詞の項目で扱ったこととは別に）、尊重されるべき福音伝道にさらに必要な他の数え方を掲げることしよう。

#### 第1章 年月日の数え方

*ichinichi*（一日）という名詞は「太陽の日」のことで、*ichinichi xincu suru*（一日辛苦する）のように用いる。ここから、形容詞の *ichi*（一）は *fito*（<sup>ひと</sup>一）と同じで [カスティーリャ語の] “*uno, una*” 「一つの」を意味し、接続している語すなわち合成された語は名詞であることが分かる。例、*ichiguan*（一願）すなわち *fitotçuno negai*（一つの願ひ）、*ichigo*（<sup>いちごう</sup>一業）すなわち *fitotçuno vaza*（<sup>わざ</sup>一つの業）、*ichi ichi*（一々）、*Ichi ichini moxi firacu*（一々に申し開く）、*ichiji*（一時）すなわち *fitotçuno toqi*（一つの時）、*Ichiji fexximo vasurenu*（<sup>へんし</sup>一時片時も忘れぬ）、など。ここから、様々なものを数えるためにこうした名詞が用いられることが分かる。その他は『語彙集』を参照のこと。なお、*ichijit*（<sup>いちじつ</sup>一日）は日の数え方である。

疑問は *icca?*（<sup>ひひとい</sup>幾日）といい、順に *ifitoi*（<sup>ひひとい</sup>日一日）、*futçuca*（二日）、*micca*（三日）、*iocca*（四日）、*içuca*（五日）、*muica*（六日）、*nanuca*（七日）、*ioca*（八日）、*coconoca*（九日）*toca*（十日）という。その他は中国語の漢数字を用いて数える。本書第1巻を参照のこと。*icca* は年、月、場所、寺院、王国の数え方にも使用される。それぞれを表す単位の語は *nen*（年）、*tçuqi*（月）、

xo (所), coqu (国) である。

曜日名は現行の百年暦法で(カトリック教徒との交渉が途切れて以来、変わってしまったのかもしれない)、順に domingonofi (ドミンゴの日=主の日), segundonofi (セグンドの日=第二日), terzanofi (テルザの日=第三日), quartanofi (クアルタの日=第四日), quintanofi (キンタの日=第五日), sextanofi (セスタの日=第六日), sabadonofi fi (サバドの日=安息日)と呼ばれていた。fi (日)とは[カスティーリャ語の]“día”「日」のことで、ixxichinichi (一七日)すなわち nanuca (七日)は“semana”「週」のことである。夜を数えるためには中国語の漢数字に ia (夜)が後置されるが、日本語の数字に同じく“noche”「夜」を意味する yo (夜)を後置して数えてもよい。例、Youo fini tçugu (夜を日に接ぐ)。疑問は iccuia? (幾夜)または iccuyo? (幾夜)で、順に ichiia (一夜), niia (二夜)あるいは fitoyo (一夜), futayo (二夜), nanayo (七夜)などのようにいう。

icutçuqi? (幾月)という問いには“mes”「月」を意味する tçuqi (月)という語を用いて fitotçuqi (一月), futatçuqi (二月), totçuqi (十月)のように答える。十から先は漢数字に guat (月)または guet (月)を後置して数える。例、juchiguat (十一月), juniguet (十二月)など。特にいずれの月かを質問するためには前に nan (何)を付け、nanguat? (何月)のように尋ねる。なお、一年の中で三月が最初の月である。

月名は順に, xoguat (正月), niguat (二月), sanguat または sanguachi (三月), xiguat (四月), goguat (五月), rocuguat (六月), xichiguachi または xichiguat (七月), fachiguat (八月), quguat (九月), juguat (十月), ximotçuqi (霜月), xiuasú (師走)という。

nan nen? (何年)という問いには漢数字に nen (年)を後置して, ichinen (一年), ninen (二年), saganen (三ケ年), yonen (四年)などのように答える。最後の例をそう言うのは, xinen と発音すると「思念」の意味になってしまうためである。他の例として, soyonen (三四年), soxijunen (三四十年)などがある。年齢を尋ねるなら、人の場合は icutatxi<sup>1)</sup> (幾歳) または totzini? (歳に)などが用いられ、例えば fatachi (二十歳), nijunen (二十年), nijuno toxi (二十の歳), toxiniju (歳二十)のように答える。成長した動物の年齢は漢数字に sai (才)を後置して数える。例, issai (一才), nisai (二才), sansai (三才)など。

王国を数えるためには、漢数字に「王国」を意味する名詞が後置され, iccacocu (一ケ国), nicacocu (二ケ国), sangacocu (三ケ国), jicacocu (十ケ国)のようになる。王国は地方に分割されており、それらの地方は漢数字に gun (郡)を後置して, ichigun (一郡), nigun (二郡), sangun (三郡)のように数える。幾何学的な測定の仕方は多様である。イスパニア人が“pulgada”「インチ」<sup>2)</sup>と呼んでいるものを日本人は漢数字に sun (寸)<sup>3)</sup>を後置して, issun (一寸), nisun (二寸), sansun (三寸)のように数える。このようにして十まで数えられる。“palmo”「掌尺」<sup>4)</sup>より若干小さい測量単位は xacu (尺)といい, xacuuotoru (尺を取る)のように用いられ, ixxacu (一尺), nixacu (二尺), goxacu (五尺)と数える。なお、「五尺」は“una braza”「1 ブラサ」<sup>5)</sup>に相当する。

[カステイーリャ語の] “legua” [「レグア」]<sup>6)</sup>には ichiri (一里), niri (二里), sanri (三里), yori (四里), gori (五里), juri (十里) などが対応する。yori (四里) を xiri と言ってしまうと「尻」の意味になってしまう。なお「半レグア」は famichi (半道) という。

## 1. 金銭の数え方

金貨, 銀貨, 銅貨, その他の貨幣を数えるためには, 中国語の漢数字に mon (文)<sup>もん</sup> という語が後置され, ichime<sup>7)</sup> (一文), nimon (二文), sanmon (三文) のようになる。cogane (黄金) も qinsu (金子) も「金」のことで, qinxá (金砂) すなわち coganeno isago (黄金の砂)<sup>いさご</sup>, cogane gusari (黄金鎖) などという。

xiricane (白金) または guinsu (銀子) は「銀」を意味し, guinxen (銀錢) または xirocaneno jeni (白金の錢), xirocaneya (白金屋) などという。この第1巻の ya (～屋) で終わる集合名詞の項目で述べた通りである。銀貨を数えるためには漢数字に rin (厘) を後置し, ichirin (一厘), nirin (二厘), sanrin (三厘), yorin (四厘), gorin (五厘), rucurin (六厘), xichirin (七厘), fachirin (八厘), curin (九厘) のようになる。十厘は ippun (一分) といい, [カステイーリャ語の] “un condín” [「1 コンディン」]<sup>8)</sup> に相当する。ippun (一分) はコンディンを “un mas” [「1 マス」]<sup>9)</sup> まで数える単位である。

これらに漢数字を前置し, fun (分) や on で終わる語を作る。例, nifun (二分), sanpon (三分), roppon (六分) など。「十分」は ichimonme (一匁)<sup>もんめ</sup><sup>10)</sup> と呼ばれ, [カステイーリャ語の] “un real” [「1 レアル」]<sup>11)</sup> に相当することになる。漢数字を前置すれば, nimonme (二匁), sanmonme (三匁) のようにさらに上位の単位で「二十匁」まで数えることができ, 二十から先は十の位に me (目) だけが追加され, 一単位ごとに monme (匁) が追加される。例, nijume (二十目), nijuichimonme (二十一匁), sanjume (三十目), xijume (四十目), fiacume (百目), fiacuichi monme (百一匁), iquanme (一貫目), jicquanme (十貫目) など。日本にはさらに価値の低い金属の貨幣すなわち銅貨もあり, これらは上記と同様, 漢数字に mon (文) を後置して数えるのが普通である。ただし, mon (文) を取り除いて, 代わりに mai (枚) を用いてもよい。例, ichimai (一枚), nimai (二枚), jumai (十枚) など。

「貨幣」を意味する一般的な語彙は jeni (錢) といい, この貨幣百枚で銀半リアルに相当する。「銅」は acagane<sup>あかがね</sup> (銅) と呼ばれ, acaganezaicu (銅細工) といえは, 「銅を細工する職人」のことである。「金属」は cane<sup>かね</sup> (金) と呼ばれ, caneuo fuqu (金を吹く) といえは「金属を鑄造すること」である。これは「インク」(鉄漿)<sup>12)</sup>, 「大工の差し金」(矩)<sup>かね</sup>, 「参加する」(兼ね) などの意味と間違えやすい。例えば, riobouo canuru<sup>りょうぼう</sup> (両方を兼ねる) は「両方に参加する」ことである。値段を尋ねるためには疑問の小辞 ica? (如何) が用いられる。例えば, Coreua ica fodoni suru? (これは如何程にする) や Coreua ica fodoni uru? (これは如何程に売る) などと問い, 答えるときは nimonme suru (二文目する) や ippun (一分) のように言う。

十単位で貨幣を数えるためには ippiqi (一疋), nefiqi<sup>13)</sup> (二疋), sanbiqi (三疋) などが使用さ

れる。chomocu (鳥目<sup>ちようもく</sup>) は「銅貨」を意味し、congodo (金銀銅<sup>こんこんどう</sup>) とは cogane, xirocane, acagane (黄金, 白金, 赤金) のことである。

## 2. 度量衡について

masu (升) と呼ばれる単位はイスパニアの“celemín”「セレミン」<sup>14)</sup>、フィリピン<sup>15)</sup>の“ganta”のようなもので、普通は液体に対して用いられるが、液体でないものにも用いられることがある。この単位を十分の一に分け、go (合) を後置して、ichigo (一合), nigo (二合), sango (三合) のように数える。十合まで数え、これが「一升」<sup>15)</sup> すなわち“un celemín”「1 セレミン」になる。この masu (升) の単位は漢数字に xo (升<sup>しやう</sup>) を後置して、ixxo (一升), nixo (二升), sanxo (三升) のように数える。十升までいくと itto (一斗) になり、百升までいくと ichicocu (一石) になる。漢数字に to (斗) を後置して、十単位で itto (一斗), nitto (二斗) と数え、百から先は cocu (石) を後置する。nicocu (二石) は「200 セレミン」、sangocu (三石) は「300 セレミン」、iicocu (十石) は「1,000 セレミン」、xengocu (千石) は「10 万セレミン」、ichimangocu (一万石) は「100 万セレミン」に相当する。

重量すなわち“cate”「カテ」<sup>16)</sup> を数えるためには漢数字に qin (斤<sup>しん</sup>)<sup>17)</sup> を後置して、icqin (一斤), niqin (二斤), sangin (三斤), roqin (六斤), jicqin (十斤), facqin (百斤), xenguin (千斤) のように数える。

酒杯すなわち日本語で sacazzuqi (盃) と呼ばれる椀や goqi (御器) という湯飲みを数えるため、漢数字に fai (杯) を後置して、ippai (一杯), niffai (二杯), sanbai (三杯), jippai (十杯) などのように言う。滴を数えるためには漢数字に teqi (滴) を後置して、itteqi (一滴), nitteqi (二滴), jitteqi (十滴) のように言うが、日本語本来の数字に xizzuqu (滴<sup>しずく</sup>) を後置して、fitorizzuqu<sup>18)</sup> (一滴<sup>ひとしずく</sup>), futaxizzucu (二滴<sup>ふたしずく</sup>) とも言う。Itteqimo tabenu (一滴も食べぬ) などのように用いる。

## 3. その他の数え方

四足動物、針の紙包み<sup>19)</sup>、絹の断片、日本の十文通貨などを数えるために、ippiqi (一匹), nifiqi (二匹), sanbiqi (三匹), roppiqi (六匹), fappiqi (百匹), xembiqi (千匹) などと言う。また、ippiqi (一匹) は「十文」、nifiqi (二匹) は「二十文」、sanbiqi (三匹) は「三十文」でもある。

魚は漢数字に con (献<sup>こん</sup>) を後置して、icon (一献), nicon (二献), sangon (三献), jicon (十献), fiacon (百献) のように数える。なお、fiacu goju sangon (百五十三献) は十二使徒の筆頭が網から獲った分量だった<sup>20)</sup>。

動物につけた荷物は数詞に da (駄) や so (さう)<sup>21)</sup> を後置して、ichida (一駄) または isso (一さう), nida (二駄) または niso (二さう), sanda (三駄) または sanzo (三さう), jisso (十さう) のように数える。この so (さう) を用いれば水差しや屏風<sup>22)</sup> も数えることがで

きる。ぼろ切れと棒を使って肩に担いだ荷物は数詞に *ca* (荷) を後置して, *icca* (一荷), *nica* (二荷), *sanga* (三荷) のように数える。

麦や米など穀物の大袋や重量感のある荷物は *tauara* (俵) と呼ばれ, 数詞に *fio* (俵) を後置して, *ippio* (一俵), *xenbio* (千俵) のように数える。王国を分割した地方, 大袋, 衣類の大荷物の数え方には *fitocouri* (一郡) が用いられる。生地, 布の断片, 麻などは *tan* (端) を後置詞して, *ittan* (一端), *nitan* (二端), *sandan* (三端), *jittan* (十端) のように数える。*ittan* は「一朝」をも意味し (一旦), *fitoasa* (一朝) と同じである。また, 「短い時間」の意味もあり, ある程度の分量や土地測定の単位 (一反・一段)<sup>23)</sup> でもある。

紙の枚数を数えるためには漢数字に *gio* (帖) を後置して, *ichigio* (一帖), *nigio* (二帖), *sangio* (三帖) のように十まで数える。十枚の単位は *socu* (束) を後置して, *issocu* (一束), *nisocu* (二束) と数える。『語彙集』には十個単位を *issocu* (束) という語を用いて数える多くのものが掲載されている。

紙の枚数などの数え方については, 『語彙集』で *ichimay* (一枚) の項目を参照されたい。*ichimay* (一枚), *nimai* (二枚) のように言う。書物を数えるためには数詞に *quan* (巻) を後置して, *icquan* (一卷), *niquan* (二巻), *roquan* (六巻), *jiquan* (十巻) のように言う。書物の章なら *cagio* (〜ヶ条) を後置し, *icquagio* (一ヶ条), *nicagio* (二ヶ条), *fiacagio* (百ヶ条) となる。

宗教上の実体や聖体を数えるためには, 漢数字に *tai* (体) を後置して, *ittai* (一体), *nitai* (二体), *sandai* (三体) のように言う。ただし, *ittai* は茶を入れる袋の数え方 (一袋) であり, *taimatçu* (松明) と呼ばれる灯明の数え方 (一たい)<sup>24)</sup> でもある。祈祷, 書物の一部や論考, 何かを行った回数や言った回数などを数えるためには漢数字に *en* (篇, 遍) を後置して, *ippen* (一篇, 遍), *nifen* (二篇, 遍), *jippen* (十篇, 遍), *fiappen* (百篇, 遍), *fiacugo jippen* (百五十篇, 遍) のように言う。

絵像, 絵画, 書簡, 薬, 茶を飲む回数などを数えるためには, 漢数字に *ucu* (服) を後置して, *ippucu* (一服), *nifucu* (二服), *sanbucu* (三服) のように言う。靴下を数えるには *socu* (足) を後置し, *issocu* (一足), *nisocu* (二足) のようになる。*tabi* (足袋) と呼ばれるなめし革の靴下や藁製の草履には *congó* (金剛) という語が用いられる。

『語彙集』の *fito* (人) や *ichi* (一) の項目で見られるように, 日本語の数詞を用いた数え方は他にもある。例えば, *fitomucaxi* (一昔) は時代の合間の数え方で, 21年が一つの単位となっている。*fitoqe* (一毛) は米, 小麦, 大麦の収穫回数の数え方で, *futaqueo toru* (二毛を取る) のように用いる。*fitotouri* (一通り) は様式, 種類, 物事の内容などの数え方, *ichigin* (一陣) は騎兵隊の数え方, *iccu* (一口) は刈る鎌の数え方である。なお, 韻文, 物語, 格言なども *iccu* (一句) という。*ichigiu* (一重) は上に重なっていくものの数え方で, 重箱, 戸棚, 官位などに用いられる。その他, 『語彙集』参照。

## 第2章 修辭的慣用句について

日本語もタガログ語と同じ修辭(比喩)が行われており、すでに解説したタガログ語法に日本語の修辭を当てはめることにした。これから見ていくことにしよう。

### 〔転用語法〕

転用語法とはある品詞を別の品詞と取り替えて用いる修辭で、頻繁に使用される。一つの数を別の数に、過去形を現在形に、現在形を命令形に、ある叙法を別の叙法に言い替える。例えば、*varera* (我ら)、*mi domo* (身ども)、*mi domora* (身どもら)、*mi domoraga* (身どもらが<sup>3</sup>) などは、スペイン語と同様に「私」の代わりに「私たち」の意味で用いられる。その他、*Iivaqega miyenu* (字分けが見えぬ)<sup>25)</sup>、*Cocoroní aiuo vomoyeba nanda*<sup>26)</sup> *sóganni vcabu* (心に哀を思へば、涙双眼に浮ぶ)、*daruru cuni*<sup>27)</sup> (荒るる国) など。

### 〔省略〕

省略も同様によく用いられる。存在動詞として三人称単数の動詞 *gia* (じゃ) が用いられるが、様々な語根や品詞と結びついて後置される。例えば、*iixoga yoi* (字正<sup>じしょう</sup>が良い)<sup>28)</sup> または *varui* (悪い) や *futarino aifaga*<sup>29)</sup> *varui* (二人の間が悪い) などの例には動詞がなく、補う必要がある。

### 〔くびき語法〕

くびき語法も頻繁に使用される。これは兼用法と同じようなもので、両者は次のようにしか区別されない<sup>30)</sup>。性数格が一定しているために、文中には何が省略されているか(例えば動詞)が分かる場合をくびき語法といい、兼用法とは、こうした性数格もしくは属辞のいずれかが異なっている場合をいう。日本語には文法上の性はないが、論理的には存在する(というのは、女性として用いられる名の多くを男性として用いることができないからだ)。例、*Tçurisuru amabitoni maguirete yaburetaru minou mini matoi* (釣りする海士<sup>あまびと</sup>人に紛れて、破れたる蓑を身に纏ひ)、『発心集』巻一の例：*Sonogo qioxouo motomurutote, cuni, sato amanequ miariqi qeru* (その後居<sup>きよ</sup>所を求むるとて、国、里遍く見歩きける) など。*namij* (並み居) の項目参照のこと。

擬古法は時折使用され、日本語では *tenifa* (手爾波<sup>てには</sup>) と呼ばれる。これは文法規則に反するとき用いられる。ただし、*tenifa* (手爾波<sup>てには</sup>) は「文法規則に従った話し方」をも指す。例、*Funeni noru tameni yoi naguigia* (船に乗るために良い風じゃ)。

連辞省略(連辞疊用と逆の修辭法)は日本語で接続詞のみならず格助詞の場合でもごく日常である。接続詞を付すとき、あるいは動詞の被制格のために格助詞を伴うべき名詞がいくつかあるときは、最後の名詞にのみ付す。例、*Yama, cuni, vmi, caua, nadouo fedatçuru* (山、国、海、川などを隔つる)。

語形変換は様々な形で用いられ、日本の詩の脚韻ではありふれている。日本語で *cariacu* (下

略)と呼ばれる語中音消失は本書でも紹介された。これは名詞どうしの合成でよく用いられ、何らかの語を省くか、短縮するために母音を省くこともある。例えば、camisori (剃刀) の代わりに sori (剃り) という場合である。

語尾音添加は多くの単一語に用いられる。そのような語を別の語に接続しなかったら、語として使用されていることにはならない。日本語慣用表現ではこのような語がたくさんある。例えば、I (胃) といえ「胃」のことだが、inofu (胃の腑) と言わなければ使用されたことにならず、理解もできない。do (度) は tabi (度) と同じ意味だが、使うとすれば ichido (一度) という形だけである。追加すべき音がある語の前に置けば、これは語頭音添加と呼ばれる語形変換の一種となる。例、cumonoi (蜘蛛の網)<sup>31)</sup>。その他は『語彙集』で jen などの項目を参照のこと。

語末音省略も時折用いられると言える。代名詞の属格から属格標識を省くときがそうである。文中にある実詞属格と一致させずに、語根に、または副詞的に用いられるのが普通である。例、Cono vazauaiua canofitono tameni jetmiógia (この災いはかの人の為に絶命じゃ)<sup>32)</sup>。この例で、cano (かの) は fitono (人の) と一致し、属格になっている。たいへん頻度の高い言い回しである。

複合語分割<sup>33)</sup>と呼ばれるギリシア語の修辞法も語形変換の一種で、日本語では名詞と名詞の間、または名詞相当句どうしの間に関係詞句を挿入する方法をそう呼んでもよいだろう。『平家』巻二の例：Naguinatade mucó tequiuo gonin naguifuxe (薙刀で向ふ敵を五人薙ぎ伏せ)。この例で、naguinatade (薙刀で) は前置詞、正確には後置詞 de (で) による道具の奪格形で、tequiuo (敵を) は対格であり、[前の語 mucó と] 関係詞によって繋がっている。

### 第3章 比喩、修辞表現について

日本人は修辞表現を多用した話し方をする。一般的な動詞の入った慣用句中で暗喩は日常的に用いられるが、ラテン語やカスティーリャ語で用いられる修辞表現はいずれも、日本語慣用表現において可能である。というのは、日本語にも諺があり、同一の作家の手で多様な修辞表現が構成されているからだ。文飾が見られる例文を通じて、これから見ていこう。

#### 〔誇張法〕

『平家』卷三十七の例：Rôcacu tamauo chiribamete cúden cumoni sobiye qeri (楼閣玉を鑲めて宮殿雲に聳えけり)、卷二十八の例：Riora, qinxu igueno chofôuo yamano gotocuni tçumi aguete (綾羅錦繡以下の重宝を山の如くに積み上げて) など。

#### 〔寓意すなわち謎掛け〕

Cocóno zanguen (虎口の讒言) とは「虎の歯の中に陥ってしまったかのような大嘘の証言」のことである (寓意で非常によく用いられる文である)。Docuxó midarini narazu (独掌みだり

に鳴らず)<sup>34)</sup>とは両掌を叩くことから生じた諺で、「片手だけでは鳴らせない」ことを表している。『太平記』巻三十四の例：Cocubiaqu fatatçuno tçuçiuo nezumiga cauaru gauaru sono cusano neuo caburu (黒白二つの月の鼠が代わる代わるその草の根をかぶる)とは「人生を無駄に浪費すること」を表している<sup>35)</sup>。Bióbuto aqíúdotoua sugunareba migatatanu (屏風と商人とは直なれば身が立たぬ：諺)とは「屏風と商人は真っ直ぐに立つことができない」<sup>36)</sup>という意味である。

#### 〔提 喩〕

例えば, caxira midaruru (頭乱るる), caxirauoyú (頭を結う)などの例があり, caxira (頭)<sup>かしら</sup>とは本来「頭」<sup>あたま</sup>のことだが, 時折「髪の毛」をも意味する。すなわち, 全体で部分を表しているのである。ラテン語にも類例がある。

#### 〔換 喩〕

隣接するものによってその内容を表すことで, yononaca caqicurasu cocochi (世の中掻き暗す心地)とは「(暗い闇のように)混乱した王国」という意味である。

#### 〔換 称〕

換称は代換法ともいい<sup>37)</sup>, ラテン語にもカステイーリャ語にもあるのと同じような修辞表現である。それゆえ, エラスムスやルティリウスなどが書いている核心を突いた定義や描写的な定義を知っていれば, 紙幅を費やしてまで様々な例を挙げる必要はない。『ギリシア・ラテン語彙集』などを参照のこと。なお, タガログ語法の解説書にもタガログ語の比喩についての情報がいくらか扱われているため, 参照されたい。

## 第4章 日本語の暗喩について

日本語にはそれぞれの方言に共通の動詞があるが, こうした動詞は暗喩的つまり転義的な慣用句に日常的に適用される。日本語で最も一般的な動詞 suru (する)を例に挙げてみよう。この動詞は多くの語根と結びつき, それらの語根の〔動詞形の〕意味を表す。その際, 語根は文脈や(言わんとする)意味に準じて格を支配するが, 多くの場合は語根が(上述の動詞とともに)副詞的に置かれる。この動詞は全方言に共通しているために, この話し方のほうが特殊な方言よりも一般的で理解しやすい。結びついて特殊な意味になるのは, ごく一部の名詞だけである。バスク地方のカンタブリア人なら誰でも理解できる(“izan”や“eguin”<sup>38)</sup>といったバスク語全方言に共通の動詞をもつ)我々のバスク語と同様である。

例, aburajimi (脂染み)から aburajimiga suru (脂染みがする), accó suru (悪口する)または accouo faqu (悪を吐く), acuni tongiacusuru (悪に貪着<sup>とんじゃく</sup>する), agatameuo suru (あがた目をする)<sup>39)</sup>, aigacarini suru (相懸りにする)または aigacarini cacaru (相懸りに懸かる)<sup>40)</sup>,



amasosoqiga suru (雨注きがする)<sup>41)</sup>, anni sói suru (案に相違する)<sup>42)</sup>, 言い換えるなら anguai (案外) または vomoino fóca (思ひの外), ando suru (安堵する), fonríoni ando suru (本領に安堵する)<sup>43)</sup>, tannu suru (足んぬする)<sup>44)</sup> または aqidaru (飽き足る) など。その他『語彙集』参照。

その他の例, baca (馬鹿) という語から bacauo suru (馬鹿をする) または bacauo yu (馬鹿を言う), bacuyeqi (博奕)<sup>45)</sup> または bacuchi (博打) から bacuyeqi suru (博奕する), bafarete suru (場晴れてする)<sup>46)</sup>, baidori または baitori (奪取り) から baidorini suru (奪取りにする)<sup>47)</sup>, ban (番) から ban suru (番する), banguari (番替わり) から banguarini suru (番替わりにする), caminariga suru (雷がする), coyagaqeuo suru (小屋掛けをする)<sup>48)</sup>, faigacu suru (廃学する)<sup>49)</sup> など。

その他の例, farauo suru (腹をする)<sup>50)</sup> または farauo qiru (腹を切る),あるいは farauo caqiru (腹をかつ切る),あるいは farauo mesaruru (腹を召さるる), faxiri cogurauo suru (走りこぐらをする)<sup>51)</sup>, fedateuo suru (隔てをする), gindoriuo suru (陣取りをする), inuo cató suru (陣を固うする), teqiuo suru (敵をする) または teqiuo nasu (敵を成す), tezzucurini suru (手作りにする), tangiacu<sup>52)</sup> suru (貪着する) など。

その他の例, vaqedori (分け取り) から vaqedoriuo suru (分け取りをする), un nomini suru (鶺呑みにする), xindai suru (進退する)<sup>53)</sup>, xuxxi suru (出仕する) すなわち cubósamaye mairu (公方様へ参る), xuye suru (集会する), yaxin (野心) または betxin (別心) から yaxin suru (野心する)<sup>54)</sup>, yecqi suru (益する) または yecqi mosu (益申す) など。その他『語彙集』参照。

動詞 yú は発言の動詞で, 様々な語根が追加され, どのような言い方をするかを意味する。例, adacoto (徒言) と組んで adacotouo yú (徒言を言う) または adacotouo facu (徒言を吐く), afouo yú (阿呆を言う), fitono aisoni yú (人の愛想に言う), aisomonó yú (愛想も無う言う), ajarauo yú (あじゃら<sup>55)</sup>を言う), caguegotouo yú (陰事を言う), fayacuchini monouo yú (早口にものを言う), giómocu (条目) から giómocuuo motte yú (条目をもって言う), ienguen uo faqu (善言を吐く), vocusoco nó monouo yú (奥底無うものを言う) など。その他『語彙集』参照。

動詞 camaye, camayuru, camayeta (構へ, 構ゆる, 構へた) は転義的に buxóuo camayuru (無精を構ゆる)<sup>56)</sup>, yocuuo camayuru (欲を構ゆる), yaxinuo camayuru (野心を構ゆる), yari, catana, nadouo camayete iru (槍, 刀などを構へている) などのように用いられる。

nağaxi (流し) という語は上の言葉<sup>57)</sup>で tçuyu (梅雨) と呼ばれている。しかし, 動詞の nağaxi, nağasu, aita (流し, 流す, 流した) は意味が転じて, xagicuuo nağasu (車軸を流す)<sup>58)</sup>, nauo nağasu (名を流す)<sup>59)</sup> または nauo cutaru<sup>60)</sup> (名を腐す), axeuo nağasu (汗を流す) namidaouo nağasu (涙を流す), fitouo nağasu (人を流す), couo uminağasu (子を産み流す) などのように用いられる。

動詞 *tate*, *tatçuru*, *eta* (立て, 立つる, 立てた) は暗喩的に, *xeimonuo tatçuru* (誓文を立つる), *camiuo tatçuru* (髪を立つる)<sup>61)</sup>, *iyeuo tatçuru* (家を建つる), *fóuo tatçuru* (法を立つる)<sup>62)</sup>, *quexeiuo tatçuru* (傾城を立つる)<sup>63)</sup>, *nauo tatçuru* (名を立つる)<sup>64)</sup>, *farauo tatçuru* (腹を立つる), *fizauo tatçuru* (膝を立つる), *ichiuo tatçuru* (市を立つる), *fóuo tatçuru* (法を立つる)<sup>65)</sup>, *touo tatçuru* (戸を立つる)<sup>66)</sup>, *xocouo tatçuru* (証拠を立つる), *tateuo tçuqu* (盾を突く) などのように用いられる。その他『語彙集』参照。

*faxiri*, *faxiru*, *faxitta* (走り, 走る, 走った) を暗喩的に用いた例: *funega faxiru* (船が走る)<sup>67)</sup>, *xiuoga faxiru* (塩が走る)<sup>68)</sup>, *curiga faxiru* (栗が走る)<sup>69)</sup>, *umaga faxitta* (馬が走った)<sup>70)</sup>, *chiyeno faxittamonogia* (知恵の走った者じゃ)<sup>71)</sup>, *chiga faxiru* (血が走る) など。

*auaxe*, *auasuru*, *auaxeta* (合はせ, 合はする, 合はせた) の例: *teuo auasuru* (手を合はする), *chicarauo auasuru* (力を合はする), *cusuriuo auasuru* (薬を合はする), *niuatoriuo auasuru* (鶏を合はする)<sup>72)</sup>, *yomi auasuru* (読み合はする), *camisoriuo auasuru* (剃刀を合はする), *fioguiuo auasuru* (評議を合はする), *metomeuo auasuru* (目と目を合はする), *yariuo auasuru* (槍を合はする) など。

*agari*, *agaru*, *agatta* (上がり, 上がる, 上がった) の例: *qiga agaru* (気が上がる)<sup>73)</sup>, *curaini agaru* (位に上がる), *te*, *dangui*, *tçuzzuni*, *gacumon*, *cuchiga agaru* (手, 談義, 鼓, 学問, 口が上がる), *fune yori agaru* (船より上がる), *yuyori agaru* (湯より上がる), *fuxinga agaru* (普請が上がる)<sup>74)</sup>, *tenqiga agaru* (天気上がる), *chiguió yacu agatta* (知行, 役上がった)<sup>75)</sup> など。

*ague*, *aguru*, *agueta* (上げ, 上ぐる, 上げた) を暗喩的に用いた例: *coyeuo aguru* (声を上ぐる), *nauo aguru* (名を上ぐる), *irouo aguru* (色を上ぐる), *gacumon nadono irouo aguru* (学問などの色を上ぐる), *fatamonomi aguru* (機物はたものに上ぐる)<sup>76)</sup>, *fatauo aguru* (旗を上ぐる), *chiguió aguru* (知行を上ぐる), *fuxinuo aguru* (普請を上ぐる), *tefonuo aguru* (手本を上ぐる) など。本来 *aguru* (上ぐる) とは「高貴な人に差し上げる」ことである。

*ái*, *vó*, *óta* (合ひ, 合ふ, 合ふた) の例: *xubiga vó* (首尾が合ふ), *cami soriga vó* (剃刀が合ふ), *nanguini vó* (難儀に合ふ), *yoi toqi sonatani mairi vóta* (良い時そなたに参り合ふた), *aiuo yu* (間を言う) または *noaiuo yú* (能間を言う)<sup>77)</sup> など。なお, *ai* (合い) または *suqi* (隙) とは「余暇」のことである。

*aqe*, *aquru*, *aqeta* (開/空/明け, 開/空/明くる, 開/空/明けた) の例: *touo aquru* (戸を開くる), *michiuo aquru* (道を空くる), *cusamonouo*<sup>78)</sup> *aquru* (器物うつものを空くる), *futauo aquru* (蓋を開くる), *anauo aquru* (穴を開くる), *yoga aquru* (夜が明くる), *aqe fatçuru* (明け果つる), *yoga aqe fanaruru* (夜が明け離るる), *toxi aquru* (年明くる), *toxiga aqete* (年が明けて), *aqesi*<sup>79)</sup> (明けの日), *aqe cure* (明け暮れ), *aqeni narú* (朱あけになる)<sup>80)</sup> など。

*aqi*, *aqu*, *aita* (開・空き, 開・空く, 開・空いた) の例: *fimaga aqu* (暇が空く), *tocoroga aita* (所が空いた), *aqinaiuo cuchiga aita* (商いを口が開いた), *iye*, *iremono nadoga aqu* (家, 入れ物などが空く) など。また, *aqi* は「秋」でもある。例, *aqiga tatçu* (秋が立つ)。さらに,

aqi は「飽き」でもある。例, acu made monouo cú (飽くまで食う), mi aqu (見飽く) など。

are, aruru, eta (荒れ, 荒る, 荒れた) の例: iyega aruru (家が荒る)。denbacuga aruru (田畠でんぼくが荒る) は「田畑が荒地になる」の意味である。また, 「狂暴になる, 危害を加える」の意味にもなる。例, gaixoga<sup>81)</sup> aruru (海上が荒る), ginxuga aruru (陣衆が荒る) など。

atari, ataru, atta (当り, 当る, 当った) の例: yaga matoni ataru (矢が的に当る), fini ataru (火に当る) など。この動詞には「憤慨する, 虐待する」の意味もある。例, fitoni qibixú ataru (人に厳しう当る)。また, 「属する, 都合が良い, 番が回る」などの意味もある。例えば, coreua mini ataru (これは身に当る) という例はラテン語の“interest”「～に興味がある」の構文と同じである。さらに, 「ある年月日に当る」ことも意味する。例, natalno xónichini ataru (ナタル [= 誕生] の生日に当る)。また, kujiga ataru (籤が当る) という例には, 字義通りの意味の他に, 「占いが当る」という意味もある。その他, fitoni yo ataru (人によろ当る)<sup>82)</sup> などの例がある。

cacari, cacaru, ata (懸／掛り, 懸／掛る, 懸／掛った) の例: caguini cacaru (鉤に懸る)。暗喩的に用いた例: mini cacatta (身にかかった)<sup>83)</sup>。この動詞は「何かの上にある物が落ちる」ことでもある。例, amega cacaru (雨がかかる)。また, 「人に何かを課す, 責任をもたせる」の意味でもある。例, soregaxini cacaro (某に掛らう)。ここから cacarite (掛り手) といえは「保証人」の意味になる。cacata<sup>84)</sup> (かかった) は「～の重さである, 天秤にかかる」という意味である。その他, teqini cacaru (敵にかかる), fatamo noni cacaru (機物はたものにかかる), vanani cacaru (毘に掛る), cabeni cacaru (壁に掛かる), cocoroni cacaru (心に掛る), fitono teni cacaru (人の手にかかる), vaqini cacaru (脇にかかる)<sup>85)</sup>, fitono cuchini cacaru (人の口にかかる) または cotabani cacaru (言葉にかかる) など。

caqe, caqu, eta (懸・掛け, 懸・掛く, 懸・掛けた) の例: goyei nadouo caquru (御影<sup>86)</sup>などを懸くる), tanomiuo caquru (頼みを掛くる), futami chiuo caquru (二道を掛くる), nasaqeuo cacuru (情けを掛くる), fitoni meuo cacuru (人に目を掛くる), cuji satauo caquru (公事沙汰を掛くる)<sup>87)</sup>, fiuo caquru (火を掛くる), cane nadouo caquru (金などを掛くる), monouo meni caquru (物を目に掛くる)<sup>88)</sup>, mononi meuo caquru (物に目を掛くる)<sup>89)</sup>, faxiuo caquru (橋を架くる), michiuo caquru (道を駆くる), no yamauo caquru (野山を駆くる), fuxinuo caquru (不信を掛くる) など。caqe (掛け) には「襲いかかる」の意味もある。例, teqiye caquru (敵へ掛くる), ni dono caqeni cono vtaxeta (二度の掛けに子の打たせた) など。その他, qini caquru (気に掛くる), coyueo caquru (声を掛くる), fagiuo caquru (恥を掛くる)<sup>90)</sup>, qeueo caquru (野を掛くる) など。

saxi, sasú, saita (指／差／刺し, 指／差／刺す, 指／差／刺した) の例: yubiúo sasú (指を指す), Ameno furuga gotoqu yatçubouo saxitezo itariqueru (雨の降るが如く矢坪を指してぞ射たりける: 『太平記』卷二十六), neuo sasú (根を差す)<sup>91)</sup>, necqiga sasú (熱気が差す), todomeuo sasú (止めを刺す) または vtçu (撃つ), xenuo sasú (栓を刺す), xiuoga sasú (潮が差す) など。

また、この動詞には「蛇や蚊などが刺す、囓む」の意味もある。例、fachiga sasu (蜂が刺す), nanacatana made saita (七刀まで刺した) など。その他、ficariga sasu (光が差す), iremono, faco, nadouo sasu (容れ物、箱などを指す)<sup>92)</sup> など。

vocoxi, vocosu, oita (起し、起す、起した) の例: neitta monouo vocosu (寝入った者を起す), acunenuo vocosu (悪念を起す), rafiuo<sup>93)</sup> vocosu (乱を起す), manqiuo vocosu (慢気を起す), icariuo vocosu (怒りを起す), coroda iyeuo vocosu (転んだ家を起す), yamaiuo vocosu (病を起す) など。

uchi, utçu, utta (打/撃/討ち、打/撃/討つ、打/撃/討った) の例: cauouo utçu (顔を打つ), teqiuo utçu (敵を討つ), vouo utçu (緒を打つ)<sup>94)</sup>, catanauo utçu (刀を打つ), tauo utçu (田を打つ), fiuo utçu (火を打つ), toriuo utçu (鳥を打つ)<sup>95)</sup>, fitouo utçu (人を打つ), tçubuteuo utçu (磔<sup>つぶて</sup>を打つ), icariuo utçu (碇を打つ), nague amiuo utçu (投げ網を打つ), teppouo utçu (鉄砲を撃つ), cuguioo utçu (釘を打つ), sauouo utçu (棹を打つ)<sup>96)</sup>, xitatçumiuo<sup>97)</sup> utçu (舌鼓を打つ) など。

tçugui, tçugu, ida (注/継ぎ、注/継ぐ、注/継いだ) の例: iqiuo tçugu (息を継ぐ), inochiuo tçugu (命を継ぐ), cubiuo tçugu (首を継ぐ), youo tçugu (世を継ぐ), cubisuuo tçugu (踵<sup>くびす</sup>を継ぐ)<sup>98)</sup> など。その他『語彙集』参照。

uoi, uô, ôta (追/負ひ、追/負ふ、追/負ふた) の例: niguru teqiuo vô (逃ぐる敵を追ふ)。この動詞は「模倣する」の意味にもなる。例, ienninno atauo vô (善人の後を追ふ)。また、「背負う」の意味にもなる。例, fiacumeuo vô (百目を負ふ), togauo vô (咎を負ふ), teuo vô (手を負ふ) など。その他『語彙集』参照。

## 第5章 日本語の発音の強弱について

本書第一部ではアクセントについて、すなわち様々な名詞にアクセントが置かれる際につけられる符号について扱い、いくつかのことを述べたが、『語彙集』にはアクセント符号が記されていない多くの語があることに注意する必要がある。おそらくどこにアクセントが置かれるのか知られていないからであろう。それゆえ、第一音節および語中音節で二つの子音の前にくる母音は長くなるのが一般規則である。例, fuzziuri (文<sup>ふづ</sup>作り)<sup>99)</sup>, tenji (転じ) など。

この規則は第一音節および語中音節で二つの子音の前にくる母音を含む名詞や単一の語のみならず、他の語や小辞と結びついた複合語にも適用される。例, tenno (天の), funbetno (分別の) など。同じことは何らかの子音で終わる語や何らかの文字が追加される語についても言える。例, fórat (放埒), foratna fito (放埒な人), foratni (放埒に) など。

別の母音の前にある母音は短縮される。例, foquan (鳳<sup>ほうかん</sup>管)<sup>100)</sup>。しかし、先行する母音に第一部で述べたアクセント符号が付いているかどうかには注意すべきである。第一音節か語中音節のみならず最終音節でも付されていなければならない。

能動動詞であれ受動動詞であれ、uru で終わる不定詞は常に最後から二音節目が長くなる。例、mamuxini cuuaruru (虻に食わるる)、axiuo motaguru (足を擡ぐる) など。助詞 ni (～に) のところで扱ったように、語に共通して追加すなわち後置される ini で終わる与格・奪格の名詞もそうである。同じことは aba や eba で終わる語や未来形についても言えるはずである。例、Niuacani acufú fuqi quittance, funeuo tachimachi cutçugayesoto xita (俄に悪風吹き来たって、船をたちまち覆そうとした)。

## 第6章 日本語の韻律について

日本語には様々な韻律があり、この言語では一般的に uta (歌) と呼ばれている。詩の種類は様々だが、主に6通りに分けられる。これら6通りの中で最も有名なものが“utas rencas” (歌 [複]・連歌 [複])<sup>101)</sup> で、通常百韻で構成される。これは renga (連歌) もしくは tçurane uta (連ね歌) と呼ばれ、動詞 tçurane, uru, eta (連ね, 連ぬる, 連ねた) に由来する。

xi (詞) と呼ばれる別の韻文もあり、歌謡を構成するためのものである。日本語には詩についての様々な書物があり、詩の中で用いられる様々な修辭、多くの固有の語彙や専門用語などが述べられている。これらの語の多くについて、アルファベット順に書かれた語彙集が読者にとって参考になる。ここにそのいくつかを挙げておく。

acare, uru, eta (あかれ, あかるる, あかれた)<sup>102)</sup>, aqetçuru (明けつる), asaqiyome (朝清め), asaqeno caje (朝開の風), asafi (朝日), boxacu (暮雀)<sup>103)</sup>, caqimaguirete (掻き紛れて), careyucu fito (離れ行く人), coji (古寺) すなわち furuitera (古い寺), fanagoromo (花衣), micuzzu (水屑) が転義的に Socono micuzzuto naru (底の水屑となる)<sup>104)</sup>, sasamegoto (私事)<sup>105)</sup>, sodeno taqi (袖の滝) すなわち namida (涙), suyetçumufana (未摘花) すなわち beni (紅), tadotadoxij (たどたどしい), tomini (頓に)<sup>106)</sup>, tomodochi (友どち)<sup>107)</sup> すなわち tomodachi (友だち), Necoga vtçucuxu cuta (猫が美しう食うた), xena (せな)<sup>108)</sup> すなわち votto (夫), yei<sup>109)</sup>, yô, yota (酔ひ, 酔ふ, 酔ふた), yeino susumuro (酔ひを勧むろう) など。その他『語彙集』参照。

(以下の3章は事実上、語彙集であるため、翻訳は省略する。)

## 第7章 不定詞、過去形の多様性

《省略》

## 第8章 聖書語彙の索引

《省略》

## 第9章 人間に関する名詞について、活動や出来事に関するいくつかの名詞や動詞とともに用いられる身体部位名詞について

《省略》

## 訳注

- 1) 原文ママ。icutoxi? の誤記であろう。
- 2) スペインで 1 pulgada は 2.3cm に相当。
- 3) 一寸は 3.03cm に相当。
- 4) 1 palmo はおよそ 21cm に相当。掌を広げた親指の先から小指の先までの長さ。
- 5) 1 braza は 1.67m に相当。
- 6) かつての距離の単位で、スペインでの 1 legua は 5.572km に相当。なお、一里は約 3.92km。
- 7) 原文ママ。ichimon の誤記。
- 8) かつての重量単位で、マレー語に由来し、マレーと中国で用いられていた。
- 9) マレー語で「金」を表す語に由来し、ポルトガル語では maz という。
- 10) 一匁は 3.75g に相当。
- 11) かつてのスペインにおける通貨単位。
- 12) ここでは「お歯黒」のことに言及している。
- 13) 原文ママ。nifiqi の誤記であろう。
- 14) 体積の単位。
- 15) 一升は約 1.8ℓ に相当。
- 16) マレーと中国で用いられた重量単位で 1 カテは 625g に相当。
- 17) 一斤は百六十匁で、600g に相当。
- 18) 原文ママ。fitoxizzuqu の誤記 (Zwartjes: 10)。
- 19) 原文は “papel de aguja” で、『日葡辞書』にも出ているが、具体的には何を指すのか不詳。
- 20) 十二使徒の筆頭とは漁師のペテロのことで、イエスの指示に従って湖に網を下ろし、陸に引き上げたところ、153 匹の魚で一杯になっていたという逸話（「ヨハネ伝」21）に言及している。
- 21) 漢字不詳。
- 22) 屏風の場合は「双」を用いる。
- 23) 一反（一段）は 300 坪で、991.7m<sup>2</sup> に相当。
- 24) 漢字不詳。
- 25) 字が読めない。
- 26) 原文ママ。カステイーリャ語訳が “lágrimas” となっているからには、namida の誤記である。
- 27) 原文ママ。aruru の誤記。
- 28) 字形が良い。
- 29) 原文ママ。aidaga の誤記。
- 30) 「くびき語法」は原語で “zeugma”, 「兼用法」は “silepsis” といい、いずれも省略形式の修辞法

である。前者は、一文中で一つの動詞または形容詞が二つの名詞に対して用いられる場合のことだが、統語的には一方の名詞のみに適用されるため、他方の名詞は別の必要な動詞や形容詞を補って解釈される。一方、後者は一文中で一つの語に二つの意味を持たせる場合の修辞法である。時には前者を両者の総称として用いることもある。

- 31) 蜘蛛の巣。
- 32) ここの苦難はあの人破滅の元である。
- 33) 原語は“*tnesis*”で、接木文とも訳される。本来なら隣接するはずの二要素間に隣接するはずのない語句が挿入される修辞法であり、例えば「空模様」を「空の模様」と言い換える場合をいう。
- 34) 「片方が争おうと思っても、双方が争うことにはならない」という意味を表す。
- 35) ここで「黑白」は夜と昼を指し、昼夜交互に鼠が根をかじることから、寿命が磨り減ることを表している。
- 36) 商人は商売のためには大嘘つきであることを揶揄したもの。
- 37) 「換称」の原語は“*antonomasia*”，「代換法」は“*hypallage*”。
- 38) バスク語で“*izan*”は繫辞動詞，“*eguin*”は所有動詞。
- 39) 故意に目を逸らす。
- 40) 双方から攻める。
- 41) 霧雨が降る。
- 42) 思惑と逆のことが起こる。
- 43) 本来の領地に帰される。
- 44) 満足する。
- 45) 賭博。
- 46) 公然とあからさまに行う。
- 47) 分捕る。
- 48) 一時凌ぎの家屋を建てて。
- 49) 学んだことを忘れる。
- 50) 切腹する。
- 51) 競争をする。
- 52) 原文ママ。*tongiaku* の誤記。
- 53) 意のままに統治する。
- 54) 裏切る。
- 55) 冗談。
- 56) 怠け心を抱く。
- 57) 京都方言のこと。
- 58) 大雨が降る。
- 59) 名声を汚す。
- 60) 原文ママ。*cutasu* の誤記。なお、「名声を失う」の意。
- 61) 髪の毛をすっかり剃り落としてから、伸び放題にする。
- 62) 何らかの学説を発表する。
- 63) 遊女を職とする。
- 64) 侮辱する。
- 65) 法律を作る。ここのカスティーリャ語訳は“*hacer o poner ley*”となっている。なお、注62も同一表記の例文だが、こちらのカスティーリャ語訳は“*levantar o publicar alguna doctrina*”であることから、両者はそれぞれ別物である。
- 66) 戸を閉める。

- 67) 出帆する。
- 68) 塩が火の中で跳びはねる。
- 69) 栗が火の中で弾ける。
- 70) 馬が死んだ。
- 71) 賢くて鋭敏な人である。
- 72) 鶏を喧嘩させる。
- 73) 顔がほてる。
- 74) 工事が終わる。
- 75) 貴人の所有になる。「知行」は「領地」のこと。
- 76) 磔の処刑台にかける。
- 77) 能で、これから演じられることの概略を述べる。
- 78) 『日葡辞書』には vtçuamono と出ているため、その誤記であろう。
- 79) 原文ママ。カスティーリヤ語訳が“el día siguiente”となっていることから、aqenofi の誤記であろう。
- 80) 赤く染まる。
- 81) 原文ママ。caixoga の誤記。
- 82) 他人を丁重に扱う。
- 83) 自分の体に触れた。
- 84) 原文ママ。『日葡辞書』には cacatta と出ており、その誤記であろう。
- 85) 今のことから逸れて、他のことに関係する。
- 86) 画像。
- 87) 訴訟を起こす。
- 88) 人に何かを見せる。
- 89) 何か物を欲しがって、それに目をつける。
- 90) 人を侮辱する。
- 91) 根を伸ばす。
- 92) 容器、箱などを作る。
- 93) 原文ママ。ranuo の誤記であろう。
- 94) 組紐を作る。
- 95) 鴨を網で獲る。
- 96) 土地を測量する。
- 97) 原文ママ。xitatçuzsumiuo の誤記。
- 98) 大勢の人々が集まっている。
- 99) 整備、工夫。
- 100) 笛の一種。
- 101) 本来、renca [renka] と無声音で発音すれば「恋歌」を指すはずだが、おそらく著者は“renca”と“renga”を混同しているのだろう。
- 102) 漢字不詳。「彷徨う」の詩歌語。
- 103) 夕暮れ時の雀。
- 104) 溺れ死ぬ。
- 105) ひそひそ話。
- 106) 速やかに。
- 107) この語は『日葡辞書』にもあり、「友だち」の詩歌語として存在した。
- 108) 漢字不詳。「夫」の詩歌語。
- 109) 原文ママ。yoi の誤記であろう。